

# コミュニケーションストラテジーとしての引用表現

——発話末の「みたいな」の表現効果——

星野 祐子\*

## Direct Quotations as a Communication Strategy:

Expressive Functions of Quotation-final *Mitaina*

HOSHINO Yuko

### abstract

Many direct quotations in Japanese conversation, most typically the ones between young peers, end with the particle *mitaina*. This study aims to identify the functions of direct quotations marked by *mitaina* by analyzing eight sets of group discussions in an undergraduate class. Each group of four students brainstormed and selected an attractive catch phrase for their academic program within twenty minutes. The analysis showed that quotations ending with *mitaina* have the following expressive features:

- demonstrate a speaker's own thoughts, ideas, and feelings in a less descriptive way
- depict previous utterances in a detailed or vivid way
- express a speaker's hesitation or lesser commitment to a bold presentation
- invite other participants' responses and/or laughter

These observations suggest that quotations with *mitaina* in Japanese group discussions serve as a communication strategy that enables participants to conduct their discussions smoothly and with humor.

Keywords : Japanese discourse, direct quotation, spoken language, the utterance-final *mitaina*, communication strategy

### 1. はじめに

従来の引用表現の研究は、主として小説などの書きことばを対象にし、直接引用・間接引用の文法的な性格を明らかにすることが中心であった。それでは、書きことばと異なり、即時的なやりとりで発話が連なる話しことばにおいて、どのような内容が引用形式に導かれ、それらはどのような機能・効果を持つのだろうか。

本稿では、引用の機能を持つ発話末の一つとして「みたいな」に注目する。この「みたいな。」は、話しことばに特徴的な引用マーカーであり、特に若年層の会話にみられるものとされる（佐竹1995、1997）。ここでは、データとして大学生の話し合い場面を用い、「みたいな」を発話末におく発話が課題解決に役に立つと同様に、円滑なコミュニケーションを保つためにも役に立つことを示す。

---

キーワード：日本語の談話、直接引用、話しことば、発話末のみたいな、コミュニケーションストラテジー

\*平成15年度生 国際日本学専攻

## 2. 先行研究

まず、書きことばを対象にした引用研究について試みる。

主要な先行研究としては砂川（1989）、鎌田（2000）、藤田（2000）があり、砂川（1989）、藤田（2000）は文法論的関心から、鎌田（2000）は語用論的関心から引用を捉える。文法論的関心から引用を捉える場合は、引用された表現を再現されたアイコン記号とみなし、語用論的関心から引用を捉える場合は、引用された表現を「元々のメッセージを新たな伝達の場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図（鎌田2000：18）」に応じて決まるものとする。このように、引用そのものの定義については、現在のところ統一の見解は得られていないが、これらの基礎的研究においては、引用と非引用を分ける指標や指標に導かれる表現の特徴、引用表現に先行する事実と引用表現の関係、「引用」と「話法」の問題など、引用という行為をめぐって様々な議論がなされている。

続いて、話しことばを対象にした研究について述べる。

書きことばを対象にした研究では、引用部分を導く中心的な指標として「と」が主に研究対象とされたが、話しことばにおいては「って」と「みたいな」を分析の対象とする研究が増えている。これらの形式は、発話末におかれることもあり、その場合は、話し手の発話態度を示したり、聞き手への働きかけといった機能を持つに至る。これらの「って」についての研究には、守時（1994）、堀口（1995）、許（1999）、岩男（2003）、鈴木（2007）などがある。

次に、本稿で中心的に扱う発話末の「みたいな」に関する研究を取り上げる。「みたいな」は、本来「XみたいなY」のように両者を比較しその類似性を指摘するものであるが、近年は引用マーカーとして、「みたいな」の使用も多々見られる。以下、発話末に置かれた「みたいな」について、若者ことばとしての使用に注目したものと、話し手の位相を離れて引用表現のバラエティとしての使用に注目したものの二種に分けて概観する。

まず、若者ことばにおける「みたいな」については、佐竹（1995、1997）、前田（2004）がある。佐竹（1995、1997）は、「みたいな」を断定回避用法の一種とし、特に客観化を印象づけるマーカーとしての機能を指摘した。また、前田（2004）は、現代の若者ことばの一つとされる「みたいな」について、大学生にアンケートを採り、実際の使用用例とその使用意識から導き出される機能について論じた。これらの研究により、円滑なコミュニケーションに敏感な若者の姿が浮かび上がるようになった。

次に、話し手の位相を超えて用いられる発話末の「みたいな」に注目した研究をあげる。

加藤（2005）は、発話末の「みたいな」の基本機能を「先行文脈に既出の何らかの概念（X）を取り上げ、その状態や程度を『Xは、一例を挙げるならば、言わばYだ』のような形で言語表現化して説明する」とした。

続く、メイナード（2005）は、一連の氏の研究を引き継ぐ形で、直接引用と思われる部分が「みたいな」に括られ統合される現象を「類似引用」と呼んだ。この「類似引用」は「みたいな」の持つ比況、例示、推量、躊躇などの意味を利用した発話行為の調整ストラテジーである。また、メイナード（2005）は、発話末の「みたいな」以外にも、発話末の「みたいな」に近い表現（例えば「みたいな感じ」）を分析対象に含め、類似表現としての「みたいな」のバリエーションとその表現性について述べた。

以上が発話末におかれる「みたいな」についての研究の紹介である。これら一連の研究傾向としては、実際の話しことばをデータとし、語用論的機能に注目するという点が共通である。しかし、インフォーマントの属性と会話内容を統制した上で、そこに現れた発話末の「みたいな」について論じたものは管見のところない。

そこで、本稿では、使用データの性格を統制し、会話を行う際に話し手が配慮する点である「内容面（話の展開に即した発話を行うこと）」と「コミュニケーション的側面（会話相手との友好的な関係を保持し、場を盛り上げること）」の両面において、発話末の「みたいな」が効果的に使われていることを示す。

また、発話末の「みたいな」と同様に、引用表現の機能を持つ「って」を比較対象とすることで、「みたいな」の機能をより明らかにしたい。

### 3. 研究方法

#### 3.1. データ

ある大学の同学部に在籍する学部学生をインフォーマントとし、話し合いのデータを収録した。収録期間は2007年7月から8月で、同性の親しい友人同士4人グループの活動を録音・録画した。収録時間はそれぞれ約20分で、今回は8グループ（男性グループ4、女性グループ4）の活動をデータとする。

話し合いのテーマは、「高校生向けに学部（または学科）紹介ビデオを作るとしたら、どのようなことを紹介するか。また、話し合いを元にキャッチコピーを作るとしたらどのようなキャッチコピーがいいか。」というものである。また、話し合いの過程においては、本来の目的から逸れた話題も出現しているが、そうした部分も含めて分析の対象とした。

文字化の基準については後掲を参照されたい。

#### 3.2. 分析方法

分析対象を抽出するにあたっては、発話末の「みたいな」に導かれる内容が、会話表現としての性格を持っているか否かに注目した。また、引用部分を会話表現として認定する際は、引用部分の文体的特徴や、末尾に置かれる終助詞、そして引用部分が会話表現であることを聞き手に予見させる特別な音調を手がかりとした。

続いて、「みたいな」に導かれた内容が、元々誰の発話であるのか、また、誰の発話とみなすことができるかに注目し以下の三種に分けた。ここでは、引用部分の内容が実際に発言されたものであるかどうかは問題としない。

- A 引用部分の内容が、元々「話し手」に属する内容である場合（4.1）
- B 引用部分の内容が、元々「聞き手」に属する内容である場合（4.2）
- C 引用部分の内容が、元々「第三者」に属する内容である場合（4.3）

なお発話例の転載にあたって、「みたいな」が括る引用部分は下線で示す。

u003C/div>

### 4. 分析

#### 4.1. 引用部分の内容が、元々話し手に属する内容である場合

なお過去に成立した内容で、なおかつ話し手本人に属する内容については次のようなものがある。

##### (1) 授業中、話し手Kがクラスの見本となったことについて (G7女性)

247 K Kちゃんちょっと前出てきて [(やってって)]  
 248 Y [え：：：]  
 249 K O先生が持ってるの ちょっとこのことば通りに動いて：：とか言って  
 250 Y ええええ  
 251 K O先生：：みたいな  
 252 S [hhhh]  
 253 I [hhhh]  
 254 Y それ【教員の評価】<sup>1</sup>じゃん

(1)はKの体験談の語りの一部である。ここでは、授業中にクラス代表の指示を受けたKが、実際に「O先生：：」(251)と発言したとは考えられず、「みたいな」が導く「O先生：：」(251)は、呼名を受けて困惑したKの心の声の描写であると考えられる。また、この「O先生：：」は、音調的な工夫もなされていた為、Kの困惑した態度はコミカルな印象を伴い、SとIの笑いを引き出すことになった。このように、自身の過去の心的

135

状況を生き生きと描写する際に、「みたいな」は効果的に使用される。

続いて、話し手と聞き手の相互作用過程において、自身の思いを伝えるべく、発話末の「みたいな」を用いた例をみてもみる。

(2) キャッチコピー考案の方針について (G9男性)

- 525 S 【学部名】でしょ 【学部名】の [キャッチコピーでしょ]  
 526 O [シカトしてる]  
 次は(・・・)するな  
 527 I hhh  
 528 S 【学部名】(2) じゃ 他の学部見て あ 俺らここ違うな みたいな  
 529 K あ そうだね 【学部名】にしかないものを  
 530 S ないものを見ようよ  
 531 O 【学部】にしかないものね (1) なんなんだろうね

本例の「あ 俺らここ違うな」(528S)は、自分も含めて「俺ら」が「(他と)違うな」と思うところを提示していくことを、以降の活動として提案している場面である。ここでは「あ 俺らここ違うな」といった会話体を引くことで、他学部との違いを探するという方針の提案が、効果的にかつわかりやすく聞き手に伝わっている。またその効果は、後続の529Kによる528Sの的確な換言「【学部名】にしかないもの」により裏付けられよう。このように、自分の主張をわかりやすく述べる際、つまり、説明のストラテジーの一方略として「みたいな」は用いられるといえる。

それでは、以下の例はどのように解釈できるであろうか。(3)も(2)と同様、自分の主張を説明するために「みたいな」が用いられた例である。

(3) キャッチコピーとサブキャッチコピーについて (G7女性)

- 329 Y 個性あふれる【仮名】[教授]  
 330 K [ちがう] だから これは  
 331 Y うん  
 332 K キャッチコピーの下でしょ 下っていうかさ だから紹介することの  
 333 Y あ:[あ:あ:あ:あ:]  
 334 K [一番大本がこれで]  
 335 Y [うん]  
 336 I [うん]  
 337 Y で [その次にこう枝葉として みたいな]  
 338 K [なんか いち そうそうそう] いち  
 339 Y うん

(3)は、329Yの発言が「サブキャッチコピー」にあたることを、Kが比喩を用いながら説明をしている場面である。以下、Kの発話に注目しながら本やりとりを詳しくみていこう。

まず、332Kの冒頭部分「キャッチコピーの下でしょ」は、Kが試みた第一の説明として捉えられる。しかし、「～下でしょ」の直後、Yから理解の応答が返されることはなかった。そこで、Kはキャッチコピーとサブキャッチコピーの構造を樹木に喩えることで、改めてYの理解を促すことを試みる。ところが、この比喩を用いた説明を開始するにあたって、Kは即座に適切なことばを見つけることはできなかった。それは、発言へのとまどいや躊躇を表す「(下) っていうかさ」や、強めの音調を伴ってもどかしさを表す「だから」から推察される。

つまり、本例の「みたいな」は、言いたいことはあり、説明を試みるものの、十分言い当てることができない、そんな話し手のもどかしさを表しているといえる。先にとりあげた(2)が、自身の主張を説明するにあたって

「みたいな」による説明を最初から採用したのに対し、(3)は、相手の反応が今ひとつだったことから、新たな説明を試みるにあたって「みたいな」を補足的に用いたのである。

本節の最後に、自身の発言の強さを緩和させる機能をもった「みたいな」を取り上げる。

#### (4) 他学部に対する否定的なコメント (G8男性)

- 52 A なんだあと  
 53 Y あんまねえって  
 54 K なんか 他の学部何やってるか よくわかんなくね? 【他学部名】とか 行って なんかどうなるの? 将来みたいな  
 55 Y hh  
 56 A 【他学部名】は：：  
 57 Y どっか就職する

(4)では、「【他学部名】とかが行って なんかどうなるの? 将来」という否定的なコメントが、「みたいな」によって緩和されている。詳しくみると、Kの真意は「なんか 他の学部何やってるか よくわかんなくね?」であるが、それをあたかも客観視するような態度で、先行と同様の内容を「みたいな」で言い換えている。

以上、本例においては、「みたいな」で思考内容を括ることによって、思考内容に対する話し手の距離感が表され、結果として「みたいな」が主張の和らげにつながるようになった。直接的な物言いを「みたいな」がうまく調整していると言えよう。

以上、引用部分の内容が元々話し手に属する内容である場合を述べた。これらはいずれも、話し手の内なる想いや意見を、聞き手に効果的に伝達することを意図して用いられていた。それは、(1)や(2)のように、元々会話体で伝えることが最良のスタイルと判断され「みたいな」が用いられる場合もあれば、(3)や(4)のように、やりとりの展開に影響され、発言に対する話し手の躊躇や緩和の態度を表すために「みたいな」が採用される場合がある。

#### 4.2. 引用部分の内容が、元々聞き手に属する内容である場合

話し手以外の者(先行話者)が提示した内容について、話し手自身の理解を確認したり、補足を行ったり、具体例を付け足す際にも「みたいな」は効果的に使用されていた。つまり、他者によって提示された先行発話を受け、自分なりの解釈を付加する際に「みたいな」を用いるのである。以下、一例を挙げよう。

#### (5) 自分達が所属する学科が、他の学科と比べて比較的学びやすいことについて (G5男性)

- 310 S 初心者用【学科名】  
 311 Y 初心者用【学科名】 初心者用【学科名】?  
 312 全員 hhhhhh  
 313 Y (3) できな：：い  
 314 T そっちで攻めるなら： なんか (単位) 取りやすいとか 入ってもそんな厳しいことありませんよ：：みたいな  
 315 Y なるほどなるほど

(5)の前半部分からは、自分達の学科が初学者にも向いているとし「初心者用【学科名】」とキャッチコピーを提案したS(310)に対し、Yが懸念を示していることが読み取れる(311、313)。その後、314Tが310Sのアイデアを引き継ぎ、「(単位) 取りやすい」とか「入ってもそんな厳しいことありませんよ」と「初心者用【学科名】」の補足説明を行う。その結果、Yを「なるほどなるほど」と納得させるに至らしめた(315)。このように、先行内容に十分な理解が得られなかった際の補足説明に会話体の使用は効果的である。

また、本例においては、「みたいな」が括る範囲を、相手意識をうかがうことのできる敬体使用と、発話の音

調的特徴から「入ってもそんな厳しいことありませんよ：：」という会話体の部分のみに限定した。つまり、並立助詞「とか」で結ばれた前半部分と後半部分は発話のスタイルが異なっていたとする。内容面から考えても「(単位) 取りやすい」とは、学科の一般的な特徴として挙げられるが、「入ってもそんな厳しいことありませんよ：：」は仮想の聞き手（ここでは大学受験生）を意識した内容であることが理解される。

このように、キャッチコピーのターゲットが、あたかも眼前にいるような発話スタイルを採ることで、話し合いの場にいる参加者は、考案すべき内容のサンプルを具体的にかつ直感的に理解できるようになったのである。

#### 4.3. 引用部分の内容が、元々第三者に属する内容である場合

まず、会話参加者が聞いた第三者の発話を、「みたいな」でまとめる例を挙げる。

##### (6) 外部講師がみた学部についての評価について (G1女性)

- 81 T え でも 誰か言っていたよね なんか来た人が 【大学名】のいいところは  
82 S うん  
83 T のびのびとした  
84 C [へ：：]  
85 K [ほんと？]

(12ライン中略)

- 98 S それで 平和そう 自由みたいな<sup>2</sup> だけど (.) なんだっけ  
99 T hh  
100 S つめが甘い みたいな  
101 C [あ：：言われた言われた]  
102 K [あ：：言われた言われた]  
102 全員 hhhhhhh  
103 T ショック

本例は、本来、会話参加者全員が聞いたはずの内容を、100Sの「つめが甘いみたいな」という表現を契機に、再び共有するにいたった場面である。また、101C、102Kで同意の応答が得られていることから、100Sの「つめが甘い」という内容は、S以外の会話参加者の記憶を呼び起こすに十分であったと推察される。しかし、100Sの直前にあたる98Sに注目してみると、98Sには「なんだっけ」というフィラーがみられるため、100Sで提示された情報は、過去に耳にした情報を十分提示しているとは考えにくい。

つまり、本例の「みたいな」は、前接の内容が、過去の場面において発せられた発話の一字一句の再現ではないことを示している。ここでは「つめが甘い」といった慣用表現が実際発せられたか否かは問題ではない。「つめが甘い」という表現から連想されるイメージを会話参加者間で共有することが重要なのである。そうしたイメージの伝達にあたって「みたいな」は効果的に働く。

続いては、想定場面において、会話参加者とは異なる第三者の発言を「みたいな」で示す例を挙げる。

##### (7) 考案したキャッチコピーについて (G1女性)

- 529 C [いいじゃん] いいじゃんいいじゃん それで クーラーはないけどないが  
530 S hhhhhhh  
531 K hhhhhhh  
531 C 実践力があります (以下後略)

(10ライン中略)

- 542 C [キャッチコピー]  
543 T [だってボン] ボンってやった後に ビデオが流れるとしたらさ：：  
544 C ああ いいかも

- 545 T hhhhhhh  
 546 S ちょっと見てみようかな：：[みたいな]  
 547 C [ちょっと] 見てみようかな [みたいな]  
 548 K hhhhhhh  
 549 C まず 最初そういうキャッチコピーでね

(7) は、考案したキャッチコピーについての評価を共有している場面である。本例では、まずTが、キャッチコピーの後に大学紹介ビデオが流れることを想定した上で、キャッチコピーを改めて評価することを提案している(543T)。これを受け、544Cが即座に肯定の評価を与え、続く546Sが、実際にビデオを見るだろう大学受験生の立場に成り代わって肯定の評価を与えた。このSの発話末に「みたいな」が現れている。先に取り上げた(5)においては、想定された聞き手として大学受験生が設定されたが、ここでは、想定された話し手として大学受験生が設定されたのである。また、ここでは、547Cが直前の546Sの発言を真似ているが、このやりとりには同意表明と遊びとしての機能が認められる。

以上、ここでの「みたいな」は、想定場面でなされた第三者の発言であることをマークする機能があることがわかった。つまり、発話末に置かれた「みたいな」が、話し手と聞き手から成る話し合い場面に、第三者的な発話を容易に取り込むことを可能にしているのである。また、ここでは結果として第三者の発話に話し手の真意(本例では同意)を託すことになった。

話し手の真意を第三者の発言に託すという点では(8)も同様である。(8)は(7)に続くやりとりである。

#### (8) 考案したキャッチコピーについて (G1女性)

- 549 C まず 最初そういうキャッチコピーでね  
 550 T [ほんとに?]  
 551 K [でも] クーラーないんか：：[みたいな]  
 552 T hhhhhhh  
 553 S だよ  
 554 C やっぱ クーラーない消して：：  
 555 K 消して  
 556 C 消して

ここで注目したいのが551Kの発話である。551Kの発話に表れた「クーラー」は実は文脈上突飛なものではなく、先行するCの発話に出現していた語句であった。そして、その「クーラー」を最初に発話場面に導入したCは、クーラーがないことを暑さに慣れるためといった積極的なニュアンスでとらえていた<sup>3</sup>。それに対して、クーラーが学部棟にないことは、一般的にはネガティブに捉えられることを、第三者の発言を借りることで暗に示したのが本例である。

つまり、本例には、直接的には伝えにくいことを、第三者の発言の形を取り、さらに発話末の「みたいな」で笑いを誘いながら、伝達意図をかなえるという高度なコミュニケーションストラテジーが採用されているといえる。

次の場面も、「みたいな」に導かれる内容が、第三者の発言であるとみなせるものである。ただし、以下の例は、先ほどの(6)～(8)と異なり、具体的な第三者を想定して発言されたものではない。

#### (9) 自分達の学部には「人当たりのいい人」が多いということについて (G6男性)

- 359 I 結構なんか 人当たり を 人当たりがいい人  
 360 K [あ：：]  
 361 W [確かに]  
 362 I いるよね いるっつうか多いよね 【学部名】は

- 363 W 【学部名】だね(2)【学部名】だもんね  
 364 K [hh]  
 365 I [うん]  
 366 W 体 あ いいやいいや  
 367 I なに?  
 368 K hh  
 369 I なになになに?  
 370 W 体育とかでき: :  
 371 I うん  
 372 W なんかボール 球技とかでき: :  
 373 I うん  
 374 W 【学部名】なのに お前なんでそう なんか周りと上手く絡めないんだよ=  
 375 I =あ: [あ:あ:あ:あ:]  
 376 W 【みたいな】  
 377 I あるね  
 378 K hh  
 379 I 一部いるよね

(9)の前半部分は、自分達の学部に属する学生の長所を語っている部分である(359-365)。ところが370W以降、Wによってその長所に対する反例が語られることになる。また、この反例提示にあたって、Wが消極的であったことは366Wの発言取り下げの発話から推察されるが、そうした躊躇の気持ちを表すために「みたいな」は効果的に使われている。「みたいな」で終わることが、「みたいな」に導かれた引用部分をあくまでも想定場面での話、たとえの話として、控えめに提示することを可能にしているのである。

なお、先に取り上げた(4)も提示に対する躊躇を伝達していたが、本例では、想定場面(ここでは球技)における第三者を設定して、その第三者に自分の想いを語らせている点で異なる。

以上、「みたいな」が導く発話が、第三者的なものとみなせる例についてみてきた。第三者的なものとみなせる例については、その再現性はどうかであれ実際にあった事例に基づくもの(6)と、第三者的な立場を借りることで自分の真意を伝える用法(7~9)があることがわかった。

## 5. 「って」との比較

「みたいな」と類似の機能を持つ「って」との比較について簡単に述べる。「みたいな」は、引用を第一とする「って」と異なり、元々は、比況・比喩を表す形式であることから、前接内容として取り上げた内容の再現性、適切性はそれほど問題とされない。

ここで、今回取り上げた「みたいな」を「って」に置き換えて考えてみよう。両者は話しことばの引用マーカーとして頻用される点では共通だが、置き換えると発話の解釈が変わるものもみられる。例えば、(1)の251K「O先生: :」については、「みたいな」が後続することで、それはKの心内描写ではなく実際の発話としてとらえる解釈も生じるだろう。また、(6)で取り上げた外部講師の発言「つめが甘い」については、「みたいな」を後続させることで、「断定的にそのものを言い表すことはできないが、喩えていうなら、こんな感じである」という、断定を避けた情報の提供を許す。断言することに抵抗を抱く若者が、「みたいな」を巧みに使い会話を進展させていくのには、そうした背景もあると考える。

## 6. おわりに

本稿では、発話末におかれる「みたいな」導く引用部分が、話し手・聞き手・第三者の誰に属するかを指標に



して、発話末の「みたいな」のコミュニケーション機能を論じた。

先に「って」との置き換えにより、「みたいな」には引用部分の再現性や、その適切性はそれほど重きを置かないことを示したが、この厳密性を問わない「みたいな」の性質が、発話提示に関する精神的な負担の軽減につながる事が考えられる。確かに、提示情報が不確実であっても「みたいな」で終わらすことによって、その提示責任を回避することができるし、先行意見に対して反論を提示する際も、「みたいな」で否定的意見を曖昧にすることができる。こうした機能は円滑なコミュニケーションを支える上で役に立つ。

また、引用マーカーである以上、「みたいな」は、話し手・聞き手・第三者の誰の発話を引いてもよく、話し手は「みたいな」を用いて、現発話にいろいろな人の“声”を取り込むことができる。さらに、引用部分の再現性、適切性はそれほど問われないことより、「って」よりも、想定場面における架空の発言を導きやすく、会話を活性化させるためにも「みたいな」は効果的に使用されていることが推察される。課題解決場面に関して言えば、「みたいな」に導かれた発話は、聞き手に具体的な場面を想起させ、自分の意見をわかりやすく説明し、聞き手を納得させうるものとして捉えることができる。

今後は、実際に発話末に「って」が置かれた例と、「みたいな」が置かれた例との具体的な比較を行うことで、「って」と「みたいな」の使い分けについて述べる。また、データを増やすことで、他の場面における引用表現のコミュニケーション機能を考えたい。

### 【文字化の方法】

行頭の数字は、文字化資料に付けた発話番号である。アルファベットは、話し手のイニシャルを示す。また、発話を転載するにあたって用いた記号は以下である。：は音の引き延ばし、[ は発話の重なり、(数字) は沈黙の秒数、hは笑い、?は発話末の上昇調イントネーション、【 】内は、本来は具体的な名称が述べられていたことを示す。

### 【付記】

本研究は、財団法人博報児童教育振興会による「第2回博報『ことばと文化・教育』研究助成」の助成対象研究「日本語相談談話の談話分析—相互行為方略・発達過程を観点に」（研究代表者：星野祐子 2007年4月～2008年3月）による研究の一部である。

### 【註】

- 1 実際の発話においては、「O先生」に対する具体的な評価がなされていた。
  - 2 98Sの「自由みたいな」については、直後に同一人物の発話が続くことと、完全に発話末であるかの認定ができなかったことにより考察外とした。
  - 3 クーラーがないことに対する、Cの見解は以下のやりとりにも表れている。
- 120 C うちの大学の【学部】はクーラーがないから：：
- 121 K [教員になっても：：]
- 122 C [教員になっても：：]
- 123 S [教員になっても] 対応できる
- 124 C そうそう暑くない
- 125 T え：：：
- 126 S あ：：
- 127 C 暑くない てか思う ホントに思う 学校行っても 全然平気だもん
- 128 K ほんと：：？

【参考文献】

- 岩男考哲 (2003) 「引用文の性質から見た発話「ッテ。」について」『日本語文法』3 (2) 日本語文法学会 pp.146-162
- 加藤陽子 (2005) 「話し言葉における発話末の「みたいな」について」『日本語教育』124 pp.43-52
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』ひつじ書房
- 許夏玲 (1999) 「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』101 日本語教育学会 pp.81-90
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者ことばとレトリック」『日本語学』14 (12) 明治書院 pp.53-60
- 佐竹秀雄 (1997) 「若者ことばと学校文法」『日本語学』16 (4) 明治書院 pp.55-64
- 鈴木亮子 (2007) 「他人の発話を引用する」『月刊言語』36 (3) 大修館書店 pp.36-43
- 砂川有里子 (1989) 「引用と話法」『講座日本語と日本語教育 4』明治書院 pp.355-387
- 竹林一志 (2002) 「主題提示の「って」の用法と機能」『日本語教育論集』18 国立国語研究所 pp.17-31
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院
- 前田直子 (2004) 「文末表現「みたいな。」の機能」『月刊言語』33 (10) 大修館書店 pp.54-57
- メイナード、泉子・K (2005) 「会話導入文一話す声が聞こえる類似引用の表現性一」『シリーズ言語学と言語教育 第4巻 言語教育の新展開 牧野成一教授古稀記念論集』ひつじ書房 pp.61-76
- 守時なぎさ (1994) 「話し言葉における文末表現「ッテ」について」『筑波応用言語学研究』1 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科 応用言語学コース pp.87-99